

常磐松文庫蔵『伝三条西実澄筆源氏物語系図』翻刻・解説

上野英子

一 解題

【書誌】

新旧二重木箱入り。新装誂外箱。内箱は上蓋中央に「源氏物語系図 三条西三光院実澄公真跡」と墨書、上蓋左下隅と側面に「子第一七八号」の紙票を貼付。

写本（折本）一冊。表紙寸法縦十七・二×横十七・四糎。花鳥文様織薄茶色緞子表紙。中央に白地書題簽貼付。題簽寸法縦十四・〇×横二・七糎。題字「源氏物語系図」。黒地に金泥暈金箔砂子散らし見返し。本文料紙烏の子（裏打ち済）全四十六丁。折本の表面のみ書写。

内題「光源氏物語系図」。序無し。片面十行×行十五字内外。正編は太政天皇（桐壺帝）とその兄弟から始まり、系譜毎にまとめる。各人物に簡略な解説を施し、朱筆で系線を引く。巻末には「系図之外人卷々注之於同人名加朱点今案料簡也」として、正編の

系譜に入らなかった人々を巻毎に列举。巻名の下には年立や並び等を記す。列举した人名の下には簡単な注記を小書きし

たり、肩に鉤点を施すこともある。文末に

本云此物語系図去長享二年／春之比肖柏等相談之訪宗祇／法師指南粗所清書之本也被／引余習以件愚本染禿筆／不可出

窓外者也／永正第九臘月二十七日／老塊散木御判／卷々年紀為備忽忘大概注付之／永正十 二 八

此一冊依羽州羈客／碩与懇命於燈下卒／馳秋毫深可禁外見／而已／天文甲辰曆中秋戌午／垂槐（花押）

とある。永正九年（一五一二）三条西実隆の本奥書、同十年の注記奥書、さらに天文十三年（一五四四）の「垂槐」（大納言）書写奥書と、以上三種の奥書をもつ。全冊一筆。旧藏者の印記無し。

なお該書には三番目の書写奥書「垂槐」をめぐってであらう、古筆家の証文と極め二枚が添付されている。

証文一通は「実澄公源氏物語系図／証文」と表書きした料紙に包まれた鳥の子で、

（裏書き）「源氏物語系図折本一冊御判アリ
天文甲辰中秋（了延）印」。

（表書き）「源氏物語系図 一冊／三条西三光院実澄公／真跡無疑者也／享保十二年／仲秋下旬／古筆了延（琴山）

印」。

とあり、享保十二年（一七二七）に記された七代目古筆家了延のもの。

また「極二枚」と表書きした料紙に包まれて、次の極札二枚がある。一枚は、

（表書き）「三条西殿実澄公御筆 源氏物語系図
折本一冊（琴山）印」

（裏書き）「光源氏物語系図奥州判有
天文甲辰中秋 一冊 四寅（榮）印」

とあるもので、二代目古筆家了榮の極め。残る一枚は、

（表書き）「三光院殿実澄公源氏系図（守村）印」

（裏書き）白紙。

初代了佐の門人であった古筆一村系に伝わる「守村」印が捺してあるもの。

三人の古筆家が、実隆の孫、三条西実澄筆としている（実澄は号三光院。元実世改実澄又実枝）。筆跡という観点からみれば、『高竈帖』所収の伝三条西実世筆（琴山極め）和歌色紙・早稲田大学図書館蔵伝三条西実枝筆源氏物語等の筆跡と比較するに、似通ってはいる。天文十三年といえ、実澄三四歳。既に実世と改名しており、正二位権大納言の官にあったので「垂槐」と称しても問題はない。但し奥書に言う「羽州羈客／碩与」については未詳。

【実隆の源氏物語系図と永正奥書本】

『実隆公記』によれば、三条西実隆は文明十九年（一四八七。この年長享と改元。実隆三四歳）五月頃に「源氏物語系図」を作り始め、翌長享二年に完成させたらしく、例えば長享二年四月二十六日条には

肖柏入来、源氏物語系図事治定落居了、自愛／＼等とある。

そして実隆はその後も何度かこれを書写していったらしく、彼の日記には系図書写に関する記述が散見する。また現存する実隆系図をみても、長享二年（一四八八）、明応八年（一四九九）、文亀四年（一五〇四）、永正九年（一五二二）と、四種の実隆奥書をもつ伝本群がある。次にこの四種の実隆奥書を列挙してみよう。

光源氏の物語系図といふ事、いづれの世より出きたり、たれ人のしわざなりといふ事をしらず。異同まち／＼にして是非わきまへがたし。さだめて展転書写のあやまりなるべし。此ころ此物語に心ざすともがら、三四ヶ年がほどだがひにあひかたらひ、五十余帖のうちしつかにひらき見て、煩乱をかりたいらぎ、浮詞をきりきる。就中氏族たしかならず前後見えざるともがらを一卷／＼にきて、一人ひとりをしるせり。

但わらは隨身ごとき其品かずにあらず、そのことわざさせるせんなきものにいたりては、是をのぞく。終にして詞論潤色をへ、則書写校合をとぐるものなり。凡かの物語は代々のもてあそび物として家／＼の注尺かずおほしといへども、桃花坊の禪閣の花鳥余情を抄して、松岩寺の相府の河海の遺漏を決し給へるに過たるはなかるべし。彼序にものこれををひろひ、あやまりをあらたむるは、先達のしわざにそむかざれば、後生のともがらなんぞしたかはざらんやと、筆をのこし給へれば、今の系図のをもむき此義理にひとしく定めをける中にも、なをあやまりなきにあらざるべし。将来君子必こゝろざしをおなじくすべしといふ事しかり。時に長享二のとし青陽の三月、これをしるしをはりぬ。

（原文は学習院大学本。但し私に句読点を施した）

右系図旧本錯乱之所々聊加潤色、去長享二年暮春之比令抄訖処、不期而及前左槐閣下賢覧、遂而応嚴旨命管城子、後見之輩補其遺闕而已

明応第八中元前二日

権大納言藤原実隆

（金比羅宮社務所蔵本）

光源氏物語系図往々流布之古本、煩乱頗多異同難解、為備末学之廃忘、去長享比各加取捨校合書一本畢、而今左衛門尉親榮依数寄深切懇望之間、凌老眼染凍筆、定有遺闕欤、見者宜令改正之而已

文龜甲子曆仲春十九日

亜槐下拾遺臣藤判

（生形貴重氏蔵『三条西実隆筆光源氏物語系図』「大谷女子短期大学紀要」三十八号影印）

此物語系図去長享二年春之比、肖柏等相談之訪宗祇法師指南、粗所清書之本也。

被引余習以件愚本染禿筆。不可出窓外者也。

永正第九臘月二十七日

老塊散木御判

卷々年紀為備忽忘大概注付之

永正十二 八

(書陵部蔵本)

これらによれば、長享本奥書は系図作成の動機と方法を記した最も長文のものとなっている。また明応本では「前左槐閣下」(徳大寺実淳か)の要請によって書写したとし、文亀本では「左衛門尉親榮」(実隆の源氏講釈を聴聞していた栗屋親榮)の懇望によって書写し与えたとするのに対して、永正本では「被引余習以件愚本染禿筆不可出窓外者也…老塊散木」とあることから、実隆は他者からの要請に拠ってではなく、自家の保存用に書写したようである。

ともあれ、長享二年から永正九年まで実に二十四年もの歳月が流れているのだが、この四種の系図間にも長年にわたった研究の深化と相まっての異同が見られるとして、伊井春樹氏は実隆源氏物語系図の変遷と意義を次のように指摘されている。

実隆は古系図から出発して、長享二年本では伝文を、明応八年では人物配列構造を確立し、文亀四年本では両巻を統合するとともに、永正九年本ではさらに左大臣に關しての改訂を加えた。その後さらに永正一七年本が書写されているが、内容的にはもはや新たに筆を加えることもないと思われるので、永正九年本とそれほど違わなかったであろう。これら諸本のうち文亀四年本がもっとも多く流布したようで、版本もその系統を引くのもによってその様相が知られる。(『源氏物語古注釈史の研究』昭和五五年桜楓社 P 548～549)

永正本の特色ともいえる左大臣の項目について、もう少し具体的に説明しよう。伊井氏によれば、実隆は長享本から文

亀本までは御行から真木柱巻までの左大臣と梅枝巻の左大臣を別人としていた。しかし永正本になるとこれを同一人物とし、それに伴って冷泉院女御と藤壺女御も姉妹関係に変わったとする。これを図示すると次のようになる。

左大臣　みゆきより榎柱にいたりての左大臣此人なるへし

女御　冷泉院御位の時代の女御　まきはしらにみゆ

左大臣　梅かえの左大臣　わかな上のもとの人なるへし

大藏卿

修理大夫

此二人女御ひとつ御はらにはあらず

藤壺の女御

今上春宮の御時よりまいり給しか、明石中宮にをされ給き　女二宮はかりをうみ奉りうせ給よし宿

木にみえたり　又梅枝に麗景殿と聞えし三君此人にや

(尊経閣文庫藏長享奥書本)

左大臣　みゆきよりまき柱梅枝の左大臣　わかな上のも此人なるへし

大藏卿

修理大夫

此二人女御のひとつ御はらにはあらず

女御

冷泉院御位の時女御　まき柱にみゆ

女子

たれともなし

藤壺女御

今上春宮の御時より参給しか、明石の中宮におされ給き　女二宮はかりをうみ奉りうせ給よし宿木に

みえたり　又梅枝に麗景殿ときこえし三君なるへし

(国立国会図書館蔵永正奥書本)

また永正本の段階になって実隆が新たに付け加えた編集上の特色として、私に次の二点も追加しておきたいと思う。

第一は列挙部分の題と注記が変わったことである。すなわち実隆本源氏系図では正編が終わったあと、正編に入らなかった所謂〈系譜外の人々〉を列挙するという構成がとられてきたのだが、永正本の段階に至って、この系譜外人々列挙部分の題と割注の本文が変化、それまでは

不載系図人々 以今案卷々注之
於童隨身等其不載之

とあったものが、永正本になると

系図之外人 卷々注之於同人者加朱点
今案料簡也

(国立国会図書館蔵永正奥書本)

となる。〈今案を以て巻毎に系図に載せなかった人々を記した。但し童や隨身などは収録しなかった〉という断り書きに代わって、〈系図外の人々を巻毎に記した。同一人物が数巻にわたって重出した場合には、朱点を打った。これは今回の処理判断である〉という注記になったわけである。

本文に沿ってこの注記を確認してみると、例えば王命婦。初出の若紫巻では「王命婦」とだけ記されていたが、紅葉賀で再録された時点で「命婦 王命婦也」と鉤点が付き、以後は葵で「王命婦」、須磨で「王命婦」、最後の薄雲巻では「王命婦 御くしけ殿にうつりてまいれり」と朱鉤点が打たれている。

第二は、この後編部分で永正本のみ各巻名の下に、

桐壺源氏自誕生至十二歳 卷末有送年之意 卷初又同

簿本十六歳

空蟬十六歳 豎並也

といった年立や並びの記述が加わった点である。巻名下のかかる注記も永正本以前にはなかったもので、おそらく永正本にある

卷々年紀為備忽忘大概注付之 永正十 二 八

という奥書に関連するものかと思われる。永正九年の実隆本奥書に加えて、同一〇年の日付が入るこの奥書もまた実隆のものであり、彼は自家保存用として書写した数ヶ月後に、今度は年立や並びを書き加えたと判断できようである。

【永正奥書本の諸本】

以上、実隆の源氏系図における永正本の位相について概説してきた。永正年間奥書をもつ実践本は、内容からみても間違いなく永正本と判断できるのだが、同じ永正本系列のものとして、宮内庁書陵部蔵本・国立国会図書館蔵本・前田育徳会尊経閣文庫蔵本・九州大学図書館細川文庫蔵本その他がある。

試みに、これら五種の本文を比較してみると、「須磨」「すま」といった漢字平仮名表記法の相違、「紫上」「紫の上」といった連体助詞の有無による相違、「給」「給ふ」といった送りがなの相違、「御」や「宮」の有無などといった小異が圧倒的に多いのだが、書陵部本と実践本とは異同が少なく、用字法まで殆ど一致する。そのなかにあつて数こそ少ないものの、特に目立って大きな異同があるので、まずはそれらを取り挙げてみよう。

① ときこゆ（実・前・国・九）——にあからせたまふときこゆ（書）

これは秋好中宮の注「御法に皇后宮ときこゆ」（実践本1オ）のくだりである。実践本を初めとする諸本が「ときこゆ」

とあるのに対して、書陵部本のみ「にあからせたまふときこゆ」とする。しかし「皇后宮ときこゆ」あるいは「皇后宮にあからせたまふ」ならば文意は通るが書陵部本の「にあからせたまふときこゆ」は不自然であろう。実隆源氏系図でも文亀本までは前者（「ときこゆ」）の本文をとる。書陵部本の誤写であろう。また同本も当該箇所には傍点が施されてある。

② 御かた（実・前・九）——御かたむかへて（書・国）

夕霧の息中納言（藤内侍のすけ腹）の注で、「六条院夏の御かたやしなひ給次郎君」（同7オ）のくだりである。「六条院夏の御かた（花散里）」が「やしなひ給次郎君」としても「（自邸に）むかへてやしなひ給次郎君」としても、それぞれ文意は通る。書陵部本と国会本のみ少し詳しい後者の本文をとるが、実隆源氏系図では文亀本まで前者の本文となっている。

③ のりゆみの日（実・前・九）——のりゆみの日右衛門督とおなしく（書・国）

これも夕霧の息中納言の注で、「又匂宮の巻にのりゆみの日出仕せし人」（同7オ）のくだり。いずれの本文でも文意は通り、ここでも②同様、書陵部本と国会本は少し詳しい共通異文となつて実践本と対立している。なお実隆源氏系図では文亀本まで前者の本文。

④ 梅かえに（実・前・九）——梅枝に明石の中宮春宮へまいり給はんとての時（書・国）

式部卿宮の息であり、薄雲女院の甥にあたる源中納言の注である。「蘭に左兵衛督梅かえに六条院より双紙か、せ給し人」（同13オ）のくだり。②③と同じパターンで、しかもここでも書陵部本と国会本の本文の方が詳しい内容となつてい

る。実隆源氏系図では文亀本まで前者の本文。

⑤ にて右大將を（実・書）——に権大納言にて右大將を（前・国・九）

致仕太政大臣（頭中將）の注で「うす雲にて右大將を兼す」（同14オ）のくだり。実践本と書陵部本とが一致し、かつ書陵部本と国会本とが対立した例である。頭中將は薄雲巻では権大納言と右大將を兼帶しており、後者の本文が正確。文亀本までの実隆源氏系図でも後者の本文をとる。「権大納言」の前後で「に」「にて」と類似した字句が重出していることから、前者は後者の目移りによる欠落かもしれない。

⑥ いへるも（実）——侍しも若菜上まりの時兵衛佐大夫といへるも（書・国・前・九）

致仕太政大臣の息であり、柏木や紅梅の弟にあたる頭中將と藏人少將の二人についた注である。「此二人まほろしの巻に……」で始まり、その最後に「……以上をとめに少納言兵衛佐侍従大夫といへるもこの人々なるへし」（同18オ）とあるところで、実践本のみ独自異文となっている。但し実隆源氏系図では文亀本まで後者の本文になっており、「侍しも」「いへるも」と前後に「も」が重出してあることから、実践本の目移りによる誤写かもしれない。

⑦ きこえき（実・前・九）——きこえき浮舟にうせ給とあり（書・国）

二条太政大臣の娘で、頭中將の正妻となった致仕大臣室の注である。「四君ときこえき」（同20オ）のくだり。②③④と同様、書陵部本と国会本が共通異文をなして実践本と対立し、かつ詳細な本文となっている。しかし実隆源氏系図では長享本から文亀本にいたるまで、この注は前者の本文で共通しており、かつ浮舟巻に致仕大臣室の物故を語った記述は見あ

たらない。

書陵部本の誤写と思われるもの(①)や、実践本の誤写と思われるもの(⑥)を含みつつも、この両本が対立した時は実践本の方が文亀本までの実隆系図と一致する傾向が強いようである。更に実践本と書陵部本が対立し、国会本は書陵部本と共通異文をとることが多いようであるが、さてこの国会本は、永正九・一〇年の実隆奥書のあとに次のような二種の奥書を持っている。

天正廿壬辰仲夏中旬 権中納言兼成 秀齡七十九

文化貳年乙丑仲夏中旬 嘯月亭主人謹書写焉

本奥書にいう「権中納言兼成」とは水無瀬兼成のこと。正二位権中納言が極官で、慶長五年に出家、同七年に八十九才で死去した人物である。三条西実枝(天正七年に正二位内大臣で出家、同年六十九才で示寂)より三才年下で、徳岡涼氏の指摘によれば、実隆家集『再昌草』永正十一年(一一五四)十一月時の詞書

廿八日孫童^{二歳}_{二男} 水無瀬^{中納言}の養子につかはすとて、思ひつ、けし

立そひて松に小松の末とをくまもらん千世の日影をそ思ふ(『私家集大成V、二七六六』)

にいう「孫童」が兼成であるという(『年報』20号所収「常磐松文庫蔵『九条家本源氏物語聞書』解題」)から、実澄の弟ということになるのだろう。

その兼成が源氏系図を書写したのが晩年の天正二十年、実践本の書写奥書天文十三年より四十八年後のことになる。かかる兼成自筆本を底本とした国会本の本文だが、書陵部本とおおよそ足並みを揃えているとはいえないものの、但し表記法や連体助詞においては、書陵部本ほど実践本との一致が見られない。また「竹川」を「竹河」と表記したり「按察」を「按

察使」と表記したりといった点で国会本書写者（嘯月亭主人）の個性が垣間見られる箇所もある。

前田育徳会尊経閣文庫本には次のような五種の奥書が入っている。

a 右系図旧本錯乱之所聊加潤色去長享

二年暮春之比令抄訖処不期而及 前左

槐閣下賢覽遂而応嚴旨命管城子了

後見之輩補其遺闕而已

明応第八中元前二日

権大納言藤原実隆

b 此系図之写本紹巴法橋以本写書之云々其

後伏見殿貞敦親王以御筆之本中院入道也足証明在之

数篇令校合少々不足之所書加之者也

c

伏見殿真筆本奥書

此物語系図去長享二年春之比肖柏等相談之

訪宗祇法師指南粗所清書之本也被引余

習以件愚本染禿筆不可出窓外者也。

永正第九臘月二十七日

道達院也

老槐散木

判

d

卷々年紀為備忽忘大概注付之^{一校了}

永正十二 八

e

也足証明云

此源氏物語系図者伏見殿

入道中務卿貞敦親王
号妙莊殿院宮

真筆也 可謁奇翫為証明聊留卑跡耳矣

慶長十年霜月二日

也足叟素然印

aが本奥書、bが書写奥書、c dが校合本の奥書、eが校合本にあった通勝証明文の写しであろう。するとbの書写年代は具体的な年代記載こそ無いもののeについての言及があることから、慶長十年以降と判断できるだろう。

この前田家本は、紹巴筆明応本を底本にしたとするものの（奥書 a b）、伊井氏が指摘した如く、その中身は永正本と変わらない。明応本の奥書が入った理由は定かではないが、底本自体に問題があったのではあるまいか。また奥書 c eによれば伏見宮筆永正本で校合したとあるが、こちらの記述は、本文の随所に異文注記があること、「系図之外人」で各巻名下についた年立や並びの注記等も異文として書入れられてあること等から、ある程度は実態に即しているようである。

九州大学図書館細川文庫蔵本は流麗な書体の美本である。しかし永正本の内容でありながら、①永正本の奥書の代わりに長享本奥書を転記する（この奥書は本文と同筆）、②全体的に仮名表記が多く、また「同上」を「上におなし」等と訓読して表記することが多い、③「系図之外人」の巻名下に年立や並びの記述がない、④欠落していた割注を付箋に書いて貼付したり、漢字表記の人名や官職名の脇に新たに振り仮名を記した小紙片を貼付する、など独自の様相を呈しており、細かな独自異文数も五本中最も多いようである。書写者が意図したのは、永正本を忠実に転写することではなく、美しく分かりやすい嫁入本を作りあげることだったような印象をうけた。

これらと比較して実践本には誤写と思しき独自異文があるものの、意図的な改変をほのめかす独自異文はなく、まずは底本を忠実に書写したものとみてよいだろう。書写奥書にいう「亜槐」なる人物が実澄だとするならば、実践本は三条西家に伝わっていた実隆自筆の永正本を三四才の実澄が丁寧に転写したものと位置づけることができるように思う。

二 常磐松文庫蔵『伝三条西実澄筆源氏物語系図』翻刻

凡 例

一 上段に実践本を翻刻し、下段には参考として、解題で採り上げた永正系諸本との主立った異同を掲示した。対校本の略号は以下の通りである。

前田育徳会尊経閣文庫蔵本…略号「前」

宮内庁書陵部蔵本…略号「書」

国立国会図書館蔵本…略号「国」

九州大学細川文庫蔵本…略号「九」

一 上段の翻刻では原文に即した行取りをし、下段には当該行の校異を記した。なお校異が複数行にまたがった時は、それに対応して翻刻の方にも空行を設けることにした。また翻刻の折山には「1才等と丁付を施した」

一 翻刻・校異ともに、原則として旧字は現行の字体に改めることにした。また見せけちは方法の如何に関わらず、すべて当該文字の傍に「ゝ」記号を付すことでそれを示し、傍書には（ ）記号、補入には（ ）の記号をかぶせた。

一 次の異同は採り上げなかった。「主立った校異」とした所以である。

① 鈎点・濁点・訓読点の有無。但し見せけちと傍点は採用した。

② 「ゑ合」「絵合」等、漢字・平仮名・片仮名等表記法の相違による異同。但し「瞿麦」「常夏」「蘭」「藤はかま」といった当て字の相違は採り上げることにした。

③ 「給ひし」「給し」等、送りがなの有無による異同。但し「給ひ」「給ふ」「給」など、送りがなの有無によって活用形に相違が生じる場合は採り上げることにした。

④ 「北方」「北の方」、「若紫巻」「若紫の巻」、「大臣室」「大臣の室」等、連体助詞「の」の有無による異同。

⑤ 九州大学本が独自に施したとみられる付箋に記された、人名や官職名等の読み仮名。

一 異同の中には頭に*印を冠して、私に説明したものもある。また「系図之外人」で人物名の列挙順が異なる場合なども、翻刻の人名下に*123…等と私に記号をうち、校異では*231…などと記して掲載順を説明した。

一 諸本の奥書・識語については既に解題で詳述したので、ここでは実践本と共通する奥書に限って、その本文異同を揭示した。

参 考

給
榊の巻にかくれ給ぬ
桐壺の帝也

秋好中宮母六条御息所

都へかへらせ給ふ合に内にまいり給て

梅壺と申きをとめに中宮にたち」
1オ

御法に皇后宮ときこゆ

さか木に賀茂のいつきにゐ給ふ

うす雲にちゝの御ふくによりており

させ給もゝそのゝ宮に女五の宮

給
—
〔九〕
給ひ

たち―〔九〕たち給

ときこゆー〔書〕にあからせたまふときこゆー

の巻―〔国〕ナシ

給
—
〔国〕
給ひ

とあひすませ給

三宮 院のひとつ御はら也摂政の北方に

なりたまひふちはかまにかくれ給

女五宮 も、その、宮にすみ給よし僅にみゆ

朱雀院 母弘徽殿太后

桐壺の巻に春宮葵に御位につき

給みをつくしに位を春宮にゆつり

わかな上に御くしおろして西山の

御寺にすませ給同卷六条院御賀

の所に一院と申此御かと也

今上 母承香殿女御」 2才

あかしの巻に二歳とみゆみを

つくしに春宮梅かえに御元服

わかな下に位につかせ給

なりたまひ―〔九〕成たまふ

母弘徽殿太后―〔国〕ナシ〔前〕母弘徽殿院太后

西―〔九〕ナシ

同卷―〔九〕おなし巻に

所に―〔九〕ひしり

女一宮 わかな上にみゆ

落葉宮 母一條御息所

若葉下に柏木の右衛門督の北
方になり給後に夕霧の大将
かたらひとり給

二品内親王 母先帝源氏宮

わかな上に六条院にわたりて
同下に二品し給柏木の巻に
薫をうみ給へり

女四宮 わかな上にみゆ

春宮 母明石中宮

わかな上にむまれ給て同下
に坊にゐ給

母一條御息所―〔九〕ナシ。
*付箋二書イテ貼付。

内親王―〔九〕親王

同―〔九〕おなしく

うみ給へり―〔九〕うめり

式部卿 母同春宮 3才

にほふ宮の巻に夕霧の中の

君をえて六条院の寝殿を

やすみ所にし給二の宮ときこゆ

かけろふに式部卿

勾兵部卿宮 母同上

わかな下にもまれ給勾宮の巻に

元服して兵部卿に任す紫上

やしなひ給し三の宮なり

若君 母宇治中君

やとりきの巻にむまれ給

常陸宮 母更衣

勾宮巻に夕霧大将のりゆみ

のかへりあるし、給し日兵部卿

宮ににほひをされし人四宮ときこゆ

式部卿―〔前〕式部卿宮／同春宮―〔前九〕春宮におなし

同上―〔前〕同〔九〕上におなし

給―〔九〕給ひ

兵部卿―〔九〕兵部卿宮

かへり―〔国〕かへ

人―〔国〕ナシ

中務宮母同春宮

同春宮―〔九〕東宮におなし

日―〔書〕ナシ

おなしのりゆみの日夕霧大将ま
ねきよせて車にのせ給し五の
宮あつまやに大宮の御なやみの
時まいり給又やとりきに上野のみ
こと殿上にさふらひ給し人」4才

一品宮母春宮におなし

これも紫上やしなひ給て六条
院の南の町にすませ給薫大将
心かけたてまつりき

たてまつりき―〔国〕たてまつりし人か

女二宮母藤壺女御

やとりきに内の御さたにて薫
大将をむこにとり給

六条院母桐壺更衣

七歳にて源の姓を賜り十二にて

姓―〔書〕性／賜り―〔前〕給り〔九〕給りて〔国〕給

元服は、き木に中将紅葉賀に

正三位中将
如元同卷に宰相中将
如元葵に

大将すまの巻にすまにくたり明石

卷に都にかへり給てかすの外の権大

納言になりみをつくしに内大臣

うす雲に御位そひて牛車の宣旨を

かうふり乙女に太政大臣藤のうら葉に

太上天皇の尊号をえ給ふ

夕霧左大臣母葵上

みをつくしに内春宮の昇殿をとめ

に元服してあさきにてかへりのほ」5オ

る同卷の秋除目にかうふり給朱雀

院行幸の時侍従になり玉かつらに

中将蘭に宰相中将
如元藤のうら葉に権

中納言わかな上に右大将同下に大納言

にて左大将に転す匂宮卷にさ

大臣大将
如元竹川に左大臣辞大将

すまに―〔書国〕彼浦に〔九〕かの浦に〔前〕かのうらに

乙女に―〔前〕乙女の巻に

のほる―〔九〕のほり

同卷の―〔九〕おなしき巻に／給―〔九〕え給

なり―〔書国九前〕なる

蘭―〔前〕藤はかま

同下に―〔九〕おなしき下に

さ大臣―〔書国九前〕右大臣

竹川―〔国〕竹河／辞大将―〔書〕辞大臣〔九〕大将をしす

薫右大将 母朱雀院女三宮

匂宮巻に元服して四位侍従とき

こゆその秋右近中将^{十四}年 おなし巻に

三位して宰相になる^{中將}如元竹河に

中納言やとりきの二月直物に権

大納言にて右大将を兼す

明石中宮 母明石上

みをつくしの三月にあかしの浦に

てむまれ給松かせに京にのほりて

大ゐにすみたまひうす雲に六条

院へむかへ給藤のうら葉に春宮へ

まいりて淑景舎ときこゆ御法に

中宮匂宮の巻に皇太后宮」⁶オ

右衛門督 母三条上

わかな下朱雀院御賀の試楽の

^{十四}年…宰相になる―〔九〕ナシ／年―〔前〕歳

竹河―〔前〕竹川

二月―〔九〕三月

給―〔国〕給ひ／京に―〔九〕京

大ゐに―〔国〕大内に／たまひ―〔国九〕給／うす雲に―

〔九〕うす雲のまきに

まいりて―〔九〕まいり

三条上―〔前〕三条宮〔上イ〕

下―〔前九〕下に

時わらはにてまいりき女楽の夜よこ
笛ふくとみえたり匂宮の巻のりゆみ
の日出仕せし人又匂兵部卿宮宇治に
て紅葉見給し日中宮の御使にてま
うてたるよしあけまきの巻にみえたり

中納言母藤内侍のすけ

六条院夏の御かたやしなひ給次
郎君朱雀院の御賀の試楽おなし
き当日あに君とおなしくまいり給
よし若菜下にみゆ又匂宮の巻に
のりゆみの日出仕せし人

右大弁母三条上

匂宮の巻にのりゆみの日出仕せし
人椎かもとに宇治へまいりたるよし
みゆわかな下に三郎君といへり

巻―〔前九〕巻に

宮―〔書〕。宮

まうてたる―〔九〕まふてたる〔国〕まうて侍たる

御かた―〔書国〕御かたむかへて／やしなひ―〔書〕やし
ない

のりゆみの日―〔書国〕のりゆみの日右衛門督とおなしく

日―〔書国〕ナシ

侍從宰相母不審

権か本に匂宮はつせまうての時

宇治へまいりたりし人」？オ

母不審―〔前〕母藤典侍母不審

人―〔国〕人か

源宰相中将母三条上

もとは藏人少将竹河に三位中将

同卷に宰相中将権本には権中将

といへり又幻の卷におなし程にてふたり

殿上し給といへる此人々にや

にて―〔九〕まで

いへる―〔九〕いへり

頭中将母藤内侍のすけ

竹河に源少将といへりやとりきに

匂宮六君にかよひそめ給し時父お

とゝの使にて待よひ過てとつたへし

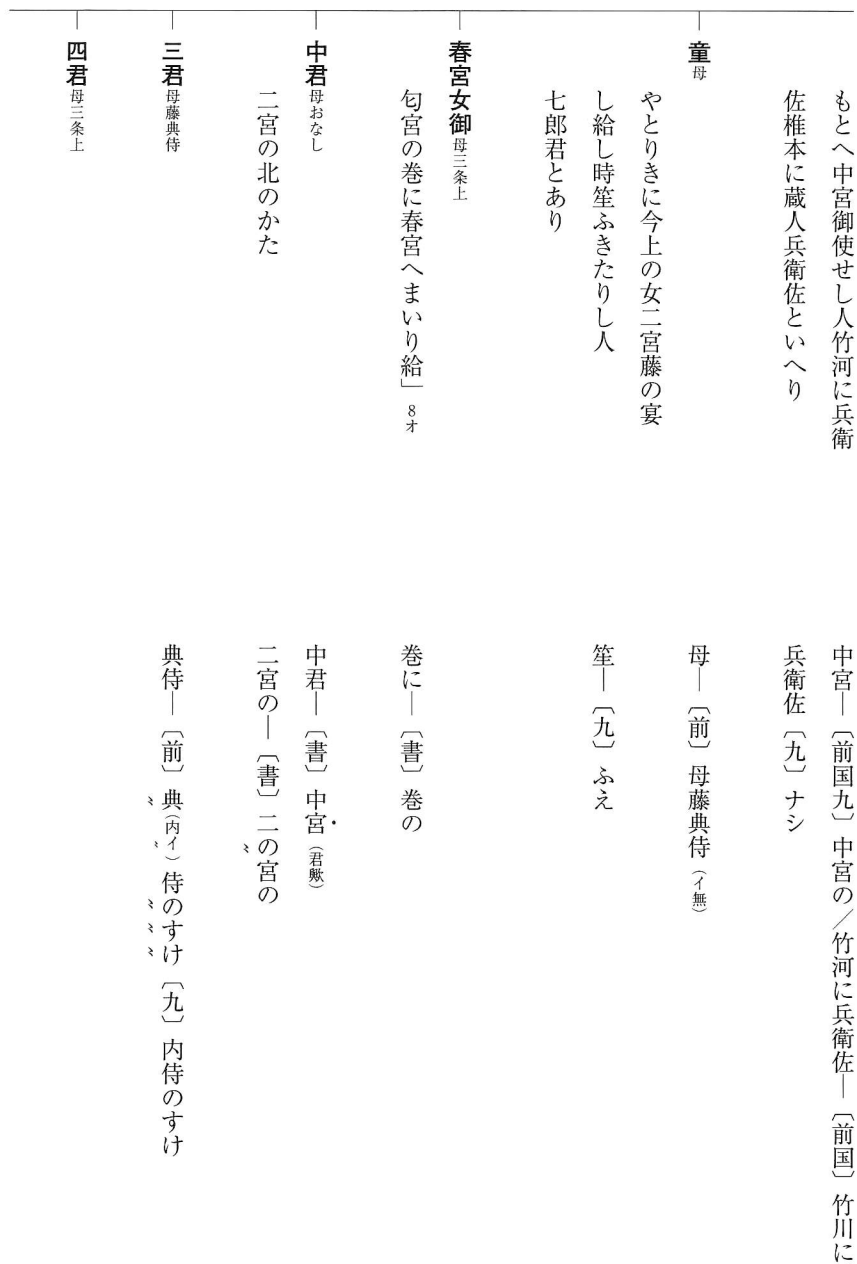
人権本に頭少将といへるこの人なるへし

内侍のすけ―〔前〕内典イ侍のすけ〔九〕内侍

頭少将―〔九〕頭の中将

四位少将母三条上

一品宮御なやみの時横川の僧都の



五君
母おなし

已上三人夕霧の巻にみゆ

六君
母藤内侍のすけ

やとりきに匂宮の北方になり給

内侍のすけ―〔前〕典侍（内侍のすけ）

螢兵部卿宮

もとは帥宮をとめに朱雀院の行
幸の時兵部卿とみゆうせ給へるよし
紅梅にみえたり

をとめ―〔書〕おとめ／の―〔九〕ナシ

侍従
母もとの北方

梅かえに六条院より父の御使にて
御本とり出し人

父の―〔国〕父宮〔書〕父宮の／にて―〔前〕に

童宮

同

此二人わかな下朱雀院の御賀の
試楽に万歳楽まひ給し人

朱雀院の―〔国〕朱雀院
し人―〔書前国九〕ナシ

「宮御方 母まき柱の上」 9才

父宮うせ給て後母君に具して

按察大納言紅梅也のもとにすみ給匂兵部卿

の宮たゝならすたつねたまひし人

四宮 母承香殿女御

紅葉賀に童にて秋風楽まひし人

帥宮

ほたるに六条院の馬場におとゝにて
あにの兵部卿宮にけはひをとりて

みえ給し人

八宮 母大臣女

宇治にうつり給よし橋姫の巻に

みえたり優婆塞の宮と申き

総角大君 母大臣女

父宮―〔九〕ちゝ母君に具して―〔国〕彼母君にうつし
て

匂―〔九〕ナシ

まひし―〔書前国九〕まひ給し

馬場に―〔書前〕馬場の

大臣―〔九〕左大臣

あけまきの巻にうせ給

中君
母おなし

あけまきに兵部卿宮にあひて

早蕨に二条院へむかへられ給

三君
母常陸か今の北方

やとり木にひたちよりのほりて

あつまやに宇治にうつり手習に」^{10才}

小野にわたり給

式部卿宮

あつまやの巻にむすめの事薫大将にけ

しきとりし人かけろふの巻にうせ給

へるよしみゆかほる大将のをちといへり

侍従
母もとの北方

宮君
母おなし

うせ給―〔九〕うせ給よし見えたり

に―〔前〕^(の巻イ)に

二条院へ―〔書〕二条院〔前〕二条院に

常陸―〔前〕常陸介

宮君―〔前〕宮

ち、宮うせ給て後あかしの一品宮へま
いりき薫大将ことかよはし給し人

ち、宮：給し人―〔九〕ナシ

冷泉院
母薄雲女院

葵に春宮みをつくしに即位わかな
下におりる給十の御子と申き

即位―〔九〕御そくゐ〔書前国〕御即位

一宮
母麗黒大臣女

むまれ給よし竹河にみゆ

竹河―〔前〕竹川

女一宮
母致仕大臣女

一宮よりはあね

女二宮
母一宮におなし

竹河にむまれ給これも一宮のあね也

竹河―〔前〕竹川

一品宮
母朱雀院におなし

女一宮なり一品のよしわかな上にみゆ」
11オ

女二宮

前齋院

葵に賀茂のいつきにみ給櫛に院の御
服によりておりさせ給女三宮とあり

●先帝

式部卿宮

はしめは兵部卿ときこえきおとめに

式部卿とみゆ

薄雲女院

后腹四宮也

桐壺に内へまいり給て藤壺とき

こゆ紅葉賀に春宮の御母女御を

こえて后にたち櫛にかさりおとし

給みをつくしに太上天皇になすらふ

るみふ給はらせ給なとす薄雲にかくれ給

院の—〔国〕古院の〔書〕故院の

式—〔国〕式（本兵懸）／きこえき—〔書〕きこえ／おとめ

—〔書国〕をとめ

給はらせ—〔国〕給はせ／に—〔前国九〕の巻に

「源氏宮」母更衣

朱雀院春宮の御時よりまいり給

て女三宮をうみ給藤壺ときこえ

きうせ給にしよしわかな上にみゆ」¹²オ

源中納言

蘭に左兵衛督梅かえに六条院

より双紙かゝせ給し人わかな下に

中納言とみえたり

若君

朱雀院御賀試楽の日皇麿

まひし人

中将

侍従

民部大輔

以上三人はいもうとの君大将の故

さとはなれし時父のもとより

蘭―〔前〕藤はかま／梅かえに―〔書国〕梅枝に明石の中

宮春宮へまいり給はんとての時／双紙―〔九〕さうしを

若君―〔国〕

* 若君ノ系線ヲ源中納言ノ兄弟ニ位置ツケテ引ク／御賀―

〔書前国〕御賀の

もとより―〔国〕もと

むかへにまいりし人

むかへ―〔九〕むかひ／人―〔国〕人か

髭黒大將室

母今の北方

大將に火とりの灰かけし人

母今の北方―〔前〕ナシ

人―〔国〕人か

紫上

母按察大納言女

十はかりの時源氏の君むかへとり

給藤のうら葉に手くるまをゆり

御法にかくれ給

按察―〔国〕按察使

源氏の君―〔前〕源氏の君

ゆり―〔前〕ゆるされミミ（り）

冷泉院女御

母髭黒北方におなし 13才

をとめに入内身をつくしに中の

君といへりしかれとも紫上よりは

いもうととみゆ

母髭黒北方におなし―〔国〕ナシ

よりは―〔九〕には

●常陸宮

阿闍梨

源氏の御八講にまいりてかへさにいもう

との御もとにてありさまかたりし人

蓬生君

末つむ花の巻に源氏（の君）にあひ逢
生に東の院にうつろひ給

● 摂政太政大臣

桐壺に左大臣にて源氏の加冠せし人
也神の巻に致仕みをつくしに太上天臣
にて摂政し給うす雲の正月にうせ給

致仕太政大臣

母三宮

きりつばに藏人少将は、木、に頭中将紅
葉賀に正四位下須まに宰相中将みをつくしに
権中納言うす雲にて右大將を兼す乙女14オ

に内大臣藤のうら葉に太上天臣
わかな下に致仕の表たてまつり給
うせ給へるよし匂宮巻にみゆ

源氏（の君）——〔書国九〕源氏君〔前〕源氏（の君）
院に——〔九〕院へ

源氏の——〔前九〕源氏君の
太上天臣——〔国〕太政大臣

にて右大將を——〔前国九〕に権大納言にて右近大將を〔書〕
に権大納言にて右大將を
太上天臣——〔国〕太政大臣

左中弁

若紫に北山へ源氏の御むかへにまいりし人花宴に中将弁なとまいりあひてといへるも此人なるへし夕かほの巻藏人弁もこの人にや

藤大納言

春宮大夫

此二人は源氏三条宮へわたり給し時致仕のおとゝひきつれてまいり給し人なり外はらの君達とあり乙女に左衛門督ときこゆるも此人々のことにやしからは五節たてまつりし左衛門督なるへし

葵上
母相国におなし

あふひの巻に夕霧の君をうみ
をきてうせ給

むかへ―〔九〕むかひ／まいりし―〔九〕まいりたりし
中将―〔書〕中将中将

卷―〔前九〕卷に

左衛門督―〔書国〕中納言左衛門督／人々―〔九〕人
しからは―〔九〕しかれは〔前〕然は

柏木権大納言母二条太政大臣四君」15才

乙女に左近少将こ蝶に右近中将か、
り火に頭中将わかな上に宰相右衛門督
同下に権中納言柏木の巻にかすの外の
権大納言になりて程なくうせ給

紅梅右大臣母同

榊に童にて韻ふたきのまけわさの
日高砂うたひし人みをつくしに元服初
音に弁少将わかな上に頭弁同下に左大
弁柏木に大納言かきりなりし時一条
の宮の事申をかれし人す、虫に
冷泉院へまいりしも此人なるへし紅梅
に按察大納言とみゆ竹河に藤大納言
さ大将かけたる右大臣になり給といへり又
椎かもと匂宮のはつせまうての御む
かへにまいりし藤大納言もこの人なるへ

母同―〔九〕母上ニ同し

同―〔九〕おなしく

事―〔前〕御事を〔九〕御事

按察大納言―〔国〕按察使大納言／竹河―〔前国〕竹川
かけたる―〔国〕かけたり／なり給と―〔九〕なり給とは
まいりし―〔九〕参りし人

しやとりきあつま屋にいたりて按察大納言といへる不審

按察―〔国〕按察使
いへる―〔国〕いへり

大夫
母

紅梅に童にて兵部卿宮いもうとの
君の事たつね給し人」
16才

麗景殿女御
母故北方

紅梅に春宮へまゐり給

中君
母おなし

左衛門督
とこ夏に藤侍従といへるは此人にや

藤宰相
わかな下賀茂祭のかへさみし人

此二人は夕霧のおとゝの六君に兵部卿
宮かよひそめ給し第三夜さふらひし人
なり又すゝむしに六条院にしたかひて

賀茂―〔前九〕賀茂の

冷泉院にまいりしも此人にや

に―〔前九〕へ

頭中將

蔵人少將

此二人まほろしの卷に夕霧の君達

わらは殿上し給へる時あひくしたりし

人々をちのとはらといへり又夕霧大

將一条宮にかよひ給とき、て此少將を

使にて父おと、あはれと思うらめしと

聞とのたまひき

以上をとめに少納言兵衛佐侍従大夫」^{17オ}

といへるもこの人々なるへし

と―〔国〕ナシ

に―〔九〕に（の）

*並記

いへるも―〔書国〕侍しも若菜上まりの時兵衛佐大夫とい

へるも

八郎君

まき柱に踏歌の時わらはにてあり

し人藤のうら葉の行幸に賀王

恩まひしも此君なるへし

〔前九〕侍しもわかなの上にまりの時兵衛佐大

夫といへるも

玉鬘尚侍 母夕顔上

四のとし夕かほの上のめのとに具し

てつくしへくたり年へて玉かつらの巻

に京へのほる蘭に尚侍まき柱に

ひけくろの北方になり給

弘徽殿女御 母同柏木

みをつくしに十二にて内へまいり給

夕霧大臣室 母按察大判言のいまの北方

雲井のかりもとくちすさみし人

近江君 母たれともなく名のり出し人

●二条太政大臣 朱雀院の御母かたの祖父はしめは

右大臣あかしに太政大臣にてうせ給へ」¹⁸才

るよしみゆ

蘭―〔前〕ふちはかま／尚侍―〔前〕内〔高イ〕侍〔のかみイ〕

同柏木―〔九〕かしは木におなし〔前〕柏木ニおなし

大臣―〔前〕大将〔臣〕／按察―〔国〕按察使

人―〔国〕人か

あかしに―〔九〕あかしのまきに

藤大納言

頭弁

さか木に白虹日をつらぬけりと誦せし人

麗景殿女御

朱雀院御位の時の女御さかきにみゆ

四位少将

ち、おと、藤の宴し給しおり源氏の御むかへにまいりて花しなへての色ならはと申つ

たへし人

まいりて―〔書〕まいり（て）

右中弁

此二人は源氏おほろ月夜のゆくえ尋まほしくて北陣の車に人をつけて見

せ給し時弘徽殿よりいて給人の御をくり

せし人ゝなり又さか木の巻に中将

宮のすけなといへるも此人々にや

右中弁―〔前国〕左中弁〔九〕右（さ歟*朱筆）中弁

さか木―〔国〕榊

弘徽殿太后

朱雀院の御母あふひに皇太后

うせ給ぬるよしわかな上にみゆ

皇太后―〔前〕皇太后宮

蛭宮也

帥宮北方

花の宴の巻にみゆ」 19才

蛭宮也―〔国〕ナシ

致仕大臣室

四君ときこえき

きこえき―〔書〕きこえき浮舟にうせ給とあり

五君

花のえんにみえたり

えん―〔書〕えむ

朧月夜尚侍

葵に朱雀院にまいりて御くしけ

殿ときこゆさか木の二月に尚侍

さか木―〔国〕榊

わかな下に尼になり給六の君といへり

●左大臣

みゆきよりまきはしら梅かえに―

にいたりて―〔国九〕の

いたりて左大臣わかな上のも此人なるへし

大蔵卿

修理大夫

此二人女御のひとつ御腹にはあらず

女御 冷泉院御位の時の女御まき柱にみゆ

女子 たれともなし

藤壺女御」^{20才} 今上春宮の御時まいり給しか明石

の中宮にをされ給き女二宮はかり

をうみたてまつりうせ給よし

宿木にみえたり又梅かえに麗景殿

ときこえし三君なるへし

●左大臣 竹川のさ大臣

女 夕霧のおとゝの御子宰相中将蔵人

少将ときこえし時あひそめ給き

●右大臣 今上の御祖父明石に右大臣とみゆ

髭黒太政大臣 こてふに右大将わかな上に左に転す」

なし―〔前〕なし(イ)

春宮―〔九〕東宮／御時―〔前国九〕御時より

をされ―〔国〕おされ

なるへし―〔前〕この人にや

竹川のさ大臣―〔国〕号竹川左大臣〔九〕竹河の左大臣

同下に右大臣にてさ大将を辞す新帝
の御うしろみをし給太政大臣うせ給
よし竹河にみえたり

頭中将

21才

源氏大将ときこえし時尚侍のつほね

より出給曉たてしとみのもとにて

見たてまつりし人

承香殿女御

朱雀院の女御今上の御母也うせ

給へるよしわかな下にみえたり

藤中納言

母式部卿一宮

まき柱に十はかりにて殿上し給と

あり竹川の正月にまゝ母の尚侍

のもとへまうてたりし人やとり木に

藤の宴の日さふらひしとみゆ

次郎君

母おなし

右大臣―〔九〕さ大臣／を―〔前〕（を）

御―〔国〕ナシ／大臣―〔国〕大臣にて

竹河―〔前国〕竹川／みえたり―〔九〕みゆ

頭中将―〔九〕頭中（藤少イ）将

たてしとみ―〔国書〕まてしとみ

たてまつりし―〔国九〕給ひし

一宮―〔書〕宮一女〔前〕一女〔国〕宮女

竹川―〔書〕竹河

の―〔書国〕ナシ

真木柱に八はかりにて母のかたみに
みるへきとちゝのゝ給し人也その後
昇進なとみえす

かたみに―〔九〕かた

なと―〔九〕ナシ

右兵衛督 母玉かつらの上

わかな下女楽の時さうの笛吹給
又朱雀院御賀の日れうわう舞
し人竹河に左近中将とみゆ同
卷に右兵衛督にて非参議なるとい」²²オ
へりやとり木に藤のえんの日御
まかなひなとせし此人なるへし

わかな下―〔九〕わかなに

竹河―〔国〕竹川

此人なるへし―〔九〕人

右大弁 母おなし

此二人玉かつらの君六条院にわかな
たてまつられし時まいり給又朱雀
院の御賀試楽の日おなしき当日
まいり給とあり竹河に右中弁おな
し卷に右大弁

竹河―〔国〕竹川

頭中將
母おなし

竹河に侍従おなし巻に頭中將

竹河―〔前国〕竹川

真木柱上
母中納言におなし

わかな下に蛭兵部卿宮の北方になり

宮うせ給て後紅梅のおと、按察

大納言ときこえし時北方になり給

まきの柱は我をわするなど別

おしみし人

まきの―〔前〕まき（の）
人―〔国〕人か

女御
母玉かつらの尚侍

竹河の四月に冷泉院へまいり給

夕霧の御子宰相中將蔵人少將

ときこえし時心つくし給し人」
23才

竹河―〔前国〕竹川

尚侍
母同女御

竹河に母のゆつりをうけて

尚侍になりてやかてうちへ

女御―〔九〕ナシ

竹河―〔国〕竹川

やかて―〔国〕まで

まいり給

●大臣

六条御息所

十六にて前坊へまいり給秋好中宮
をうめり十九にて宮にをくれ給

前坊―〔九〕先坊

三十にてむすめの斎宮に具して
伊勢にくたりみをつくしにのほりて
程なくうせ給ぬ

に―〔九〕へ

●大臣

24才

女御

宇治の八宮の御母

●大臣

宇治宮北方

姫君ふたりをうみをきてかく
れ給よしはしひめの巻にみゆ

誰ともみえず

常陸介北方

宇治の宮の北方のめいもうとは

中将君とて宮にさふらひき北方

うせ給て後手習の君をうめり

後にひたちに具して子ともあまた

ありき

誰ともみえず―〔前国〕
*人名ノ位置ニ揭示スル

もうとは―〔書前国九〕もとは

●大臣 25才

入道播磨守

近衛中将なりけるか辞して播磨守

になる彼国にてかしらおろしたりと

みゆわかな上にかの国をさりと

ふかき山に入ぬ

入道播磨守―〔前〕入道播磨守（前播磨守入道イ）〔国〕播磨守

上―〔九〕ナシ／国―〔書前国九〕浦

明石上 母中務のみこのむまこ

松かせに彼浦をはなれて大井に

すみしか乙女に六条院にわたりて

冬の御かたときこゆ

按察大納言

按察――〔国〕按察使

雲林院律師

源氏の御をち法文なとよませ給

し人也賢木にみゆ

の――〔前〕ナシ

賢木――〔前〕榊

桐壺更衣

源氏をうみたまてまつりて三と

せといふにはかなく成ぬかきりとて

まかて侍る時輦をゆるさるとり

へ野にうつす夜三位を、くらは

源氏――〔前国〕源氏の君〔九〕源氏君／て――〔九〕ナシ

輦を――〔前〕てくるま

、くらは――〔国〕、くる

●按察大納言

26才

按察――〔国〕按察使

紫上母

母北山僧都妹也

妹也――〔前〕のいもうと

●按察大納言

按察――〔国〕按察使

「五節君

をとめにまひ姫にまいりてやかて
さふらひき外はらのむすめとあり

と―〔国〕に

●大将

故大将といへりあつま屋にみゆ―

左近少将

ひたちの介かむこ

●権中納言

右衛門督かけたるとみゆ―

左衛門佐

源氏中河の御かたゝかへの時わらは
にてありし小君也いもうとのおとこ
に具してひたちへくたり関屋に
のほるうつせみの君の弟なり

中河―〔前国九〕中川

かけたる―〔書前国〕かけたり〔九〕かけたりき

空蟬君

27才 父の中納言うせて後伊与介か

妻になる又常陸になりてくたりし

時具してくたり関屋に京へのほり

て同巻に介にをくれて後にあま

の―〔九〕ナシ

に成て二条院の東院にすみき

●右衛門督

女母小野尼

中将なる人の北の方うせにし

よし手習にみゆ

●参議宮内卿

明石乳母 女院の宣旨

源氏かたらひとりて明石へくたし

給松風に姫君にくして都へのほりぬ

●三位中将

夕顔上

致仕のおと、藏人少将ときこえし

ころかよひて玉かつらをうめりその

女院の――〔書前〕母院の〔九〕女院

上――〔九〕ナシ／おと、――〔国〕おと、の

後夕かほの宿にて源氏にあひ」28オ

なにかしの院とかやにて物にとられ

てうせぬとし十九

宰相

宰相君

玉かつらの君の女房六条院にすみ

給し比人々の返事かきし人竹河巻に

かほるに歌よみかけしも此人にや

●参議藤原惟光

母大貳乳母

はしめは民部大輔とみゆ乙女に津の

かみにて左京大夫かけたり梅かえに宰相

兵衛尉

童にて殿上をゆるいもうとの五節

に夕霧のふみつかはし給し御使也梅か

えに兵衛尉みきはにうつまれし

薫物ほりてまいりし人

返事―〔前〕返事（しゝ）〔九〕返し／竹河巻―〔前〕竹川

巻〔国〕竹川

しも―〔国〕しも

殿上をゆる―〔前〕殿上（をゝ）ゆるさる

●前播磨守

「藤典侍

五節の舞姫夕霧のおとゝのおもひ
人わかな下に内侍のすけとみゆ

おとゝの――〔九〕ナシ

内侍のすけ――〔九〕内侍すけ

山阿闍梨」

²⁹オ

これみつか兄と夕かほにみえたり

兄と――〔九〕おとうと（あにイ）

少将命婦

夕かほの君はかなく成し時少将
の命婦にきかすなどのたまひし人

人――〔国〕人か

参河守妻

夕かほに大貳の尼のなやみし時ありき

尼の――〔九〕尼

源義清

若紫に藏人にてかうふり給はり明石に――
少納言とみゆ身をつくしに頼負佐
をとめに右中弁にて近江守を兼す

五節

乙女巻に内にたてまつりしにやかて
さふらふよしみゆ

巻――〔国〕ナシ

●左中弁

宇治宮の北方のは、かたのおちと
いへり

おち―〔前国〕をち

弁尼

母かしは木のめのと」 30才

女三宮の侍従のめのとのめい薫大将に昔の
事申きかせし人さまかへたるよし早蕨
の巻にみゆ

●伊豫介

はしめは伊与にくたり常陸になりて
関屋にのほりおなし巻にうせぬ

くたり―〔書国〕くたりしか

おなし―〔九〕おなし年

紀伊守

源氏御かた、かへの中河の家あるし
関屋に河内守になる子ともありと
は、木、にみゆ

中河―〔前国〕中川

蔵人右近将監

源氏大将にて斎院の御襖につかう
まつり給し時一員したりし人なり
大将すまの浦にをもむき給しおり

右近―〔前〕左〔右〕近

給し―〔書国〕し

をもむき―〔前国九〕おもむき

殿上の御ふたけつられかへりのほ

りて靱負尉になる松風に

かうふり給りき

蔵人少将妻

うつせみの君のまゝむすめ源氏うつせ

みのもぬけの夜あひ給て後軒」³¹オ

はの萩をむすはすはとよみて

つかはしたりし人

●常陸介

もとはみちのくのかみ後にひたち
になる

蔵人式部丞
母前妻

あつま屋に内よりの御使にて

匂宮へまいりし人

蔵人右近将監
母今北方

薫大将昔のゆかりとおほして蔵人

今―〔九〕今の

おほして―〔九〕思召て

になしてわか、たの将監になさるとあり

なさる―〔前〕なさる、

童
母おなし

手習の君小野にありとき、て薫

の文もたせてつかはされし人

人―〔国〕人か

源少納言妻
母前妻

少納言妻―〔国〕少納言

讃岐守妻
母同

少将北方
母今北方

今―〔前九〕今の

手習の君にといひし少将のひきたかへ

うつりし人」
32才

●太宰大貳

源氏すまにおはしまし、比筑紫より
のほるとてをとつれたてまつりし人

筑前守

ち、のつかひにて須磨へまいりし人

人―〔国〕人か

「五節

源氏あひ見給し人なり父に具して

須磨の巻にのほる明石の巻乙女の巻
にも源氏へをとつれたてまつりき

乙女の巻―〔前〕ナシ

●太宰小貳

夕かほの上のめのとのおとこ

豊後介

ちゝうせて後玉かつらの君を具し
てのほる六条院へわたり給し時
そのかたの家司にくはゝりき

次郎

次郎―〔前〕二郎

三郎

此二人はつくしにめまうけて京へ」^{33オ}
ものほらす

のほらす―〔書〕大夫の監にすかされて姫君の事たはから

揚名介妻

夕かほの巻にみゆ

んとせし人（＊小書）

姉御もと

これもつくしにありつきてのほらす

「兵部君

もとはあてきといひき姫君に

くしてのほりぬ

●兵部大輔

わかむとをりといへり――

大輔命婦

母左衛門のめのと

すゑつむの君の事源氏に申

きかせし人」 34オ

人―〔国〕人か

わかむとをり―〔前〕わかとをり

系図之外人

卷々注之於同人者加
朱點今案料簡也

系図之外人：料簡也―〔九〕ナシ

桐壺

源氏自誕生至十二歳 卷末有送年之意

卷初又同

後涼殿更衣

桐壺更衣母

靱負命婦

内侍のすけ

右大弁*1

典侍*2

藤壺御母后*3

大藏卿*4

源氏：卷初又同―〔九〕ナシ／至―〔前〕ナシ／又―〔国〕文
母―〔九〕ナシ

内侍のすけ―〔前〕内侍のすけ藤つほの御事申きかせし人
典侍―〔九〕ないし藤つほの御事申しきかせし人

*1 2 3 4 5 6―〔前〕 3 4 5 6 1 2 (掲出順)

内侍*5

命婦*6

幕木 十六歳

十六歳―〔九〕ナシ

左馬頭

藤式部丞

左―〔前〕右〔左〕

左馬頭妻

大納言

左―〔前〕右〔左〕

左馬頭妻木枯女

博士 藤式部妻の父

左馬頭妻―〔国〕左馬頭妾〔前〕右馬頭妻

藤式部妻

中納言君葵上官女

藤式部妻―〔前〕藤式部丞妻〔九〕藤式部せうのつま／君

―〔前〕。君

中務同上

中将君空蟬官女

同上―〔九〕あふひの上の官女

空蟬 十六才 豎並也

十六才豎並也―〔九〕ナシ〔前〕十六歳豎並也_イ

民部のおもとと一本 少輔のおもと

少輔―〔九〕せう

夕顔 十六才至十月 豎並也

十六才…並也―〔九〕ナシ〔前〕十六才至十月豎並也_イ

大貳乳母

参河守

大貳乳母―〔九〕大貳のめのと_{惟光女}〔前〕大貳乳母_{惟光母}

揚名介

中将君六条御息所官女

才―〔国〕歳

右近夕顔上官女

惟光朝臣父の乳母

夕顔上乳母少貳妻也

藏人少将

小貳妻也——〔九〕小貳のつま

文章博士

若紫十七才 自三月至冬

十七才…至冬——〔九〕ナシ〔前〕十七才…至冬_イ／才——

北山のひしり

北山僧都紫上の御母のおちうせぬるよしわかな下にみゆ

〔国〕歳

おち——〔前〕をち／下に——〔書〕に

明石上母故中務宮のむまこのよし松風の巻にみゆ

35才

むまこ——〔九〕まこ／みゆ——〔国〕被書

紫上外祖母按察大納言後家 *1

いぬき*2

紫上外祖父——〔九〕むらさきの上母かたのおうち／*12

少納言乳母

北山僧都の弟子

——〔九〕21〔掲出順〕／按察大納言——〔国〕按察使大納言

王命婦

弁藤つほのめのとこ

少納言乳母——〔九〕少な。こんのめのと

たいふ紫上女房

兵部卿宮北方紫上のまゝ母

女房——〔九〕女房ぜうはこれみつとみる

末摘花十七 十八才春事 横堅相兼タル並也

左衛門乳母

筑前守さ衛門乳母の後のおとこ

十七…並也——〔九〕ナシ〔前〕十七…並也_イ

兵部大輔妻大輔命婦かまゝ母

中務奏上官女

乳母の——〔国〕めのと母の

末摘のめのと

侍従末つむのめのとこ

中務…末摘のめのと——〔九〕ナシ

斎院

左近命婦

末つむのめのとこ——〔前国〕末つむのめのと

斎院——〔国〕斎院

肥後采女

紅葉賀 十八才至七月 立后 末調有経月日之心

参議左衛門督

参議右衛門督 此二人紅葉賀日の樂行事

左大将

承香殿女御四宮母儀

命婦王命婦也

中納言君 藤壺女房

中務君同上

少納言乳母

犬公

一院

源典侍

修理大夫

花宴 別人なし 十九才

十九才―〔九〕ナシ〔前〕十九才_イ

葵 二十才 二十才事面卷之間ニ在之 物語ノ面ニ不見也

二十二才…不見也―〔九〕ナシ〔前〕廿二才廿才事物語の面ニ不見也兩卷之間ニ在之_イ／在之―〔国〕有之

斎院 末つむニみえし人

少納言のめのと

斎院―〔国〕斎院

源内侍のすけ

山の座主

宰相君夕霧のめのと

中納言君

あてき葵上のわらは

弁少納言のめとの女 *1 36才

*123―〔前書国九〕321〔掲出順〕

中将君*2

王命婦*3

中将君―〔前九〕 中将君源氏官女

賢木 二十二 三 四歳 至六月

二十…六月―〔九〕ナシ〔前〕二十…六月^イ

王命婦

内侍のかみ

少納言乳母

紫上継母

中将権斎院の女房

中納言君臘月夜の女房

弁 藤壺の女房

中宮大夫

式部 春宮の女房

藤壺の御母さ^{ウキ}

山の座主

横川僧都 藤壺御母かたのおち

おち―〔前九〕をち

花散里 二十四才 五月

二十四…五月―〔九〕ナシ〔前〕二十四…五月^イ

麗景殿女御 桐壺帝女御 花散里姉

花散里上<sup>女御の御いもうと
三君といへり</sup>

帝―〔前〕御門の／花散里上―〔九〕花ちるさと〔前〕花

ちる里〔国〕花散里

女時鳥の贈答あり

時鳥―〔前〕郭公〔九〕ほと、きす

須磨 二十五 六才

二十五才―〔九〕ナシ／二十五才―〔前〕二十五才六

花散里上

中納言君葵上女房

宰相君夕霧乳母

紫上継母

才

麗景殿女御

少納言乳母

中務源氏官女

中将同

王命婦

北山僧都

中納言君おほろ月夜の女

千枝此比の絵師といへり

つねのり同上

大貳北方

明石上母

春宮の御めのと

明石 二十六 七才至秋

女五宮嵯峨の御つたへにて筆の上手なりし人といへり

明石上母

花散里上

濡標 二十七 八才 37才

夕霧のめのと * 1

中将源氏官女 * 2

中務〔同上〕 * 3

花散里上 * 4

故院宣旨明石姫君のめとの母 * 5

麗景殿 * 6

摂津守 * 7

斎宮女別当 * 8

斎宮内侍 * 9

斎宮の御めのと * 10

同―〔前〕同上〔九〕上二同

同上―〔九〕ゑし

二十六：至秋―〔九〕ナシ〔前〕二十六：至秋^イ
 筆の上手―〔九〕筆上す

濡標―〔九〕みを盡〔国〕濡標／二十七八才―〔九〕ナシ

〔前〕二十七八才^イ

同上―〔九〕上二おなし

の母―〔前〕（の母^イ）

摂津守―〔九〕津のかみ／斎宮―〔国〕斎院

斎宮内侍―〔国〕斎院内侍／斎宮の―〔国〕斎院の／御―

〔九〕ナシ

蓬生^{二十七才} 末詞有送年之意
横ノ並 但末ハ堅ニモナルヘキ歟

侍従 * 1

大貳妻 * 3

大貳のおい 侍従にかたらふといへり

* 5

斎院 うせ給へるよしみえたり * 2
大貳 むすめともありとみゆ * 4

花散里 * 7

末摘のめのと故まゝといへり * 6

少将侍従かをはの老ひと * 8

関屋 別人なし
三十八才九月 横並

絵合^{三十才三月二十九才事可置兩卷之間} 但此卷斎宮
女御入内可為二十九才冬歟云々

前斎宮女別当

平内侍のすけ 梅壺の方人

少将命婦 同上

中将命婦 同上

修理宰相入内の奉行せし人

侍従内侍 同上

大貳 典侍弘徽殿の方人

兵衛命婦 同

* 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 — [書] 掲載順を訂正し、実践本と同じにする。

二十七…ナルヘキ歟 — [九] ナシ [前] 二十七…ナルヘキ
歟^イ

斎院 — [国] 斉院

おい — [前] をひ

* 1 2 3 4 5 6 7 8 — [書] 掲載順を訂正し、実践本と同じにする。

三十八才…横並 — [九] ナシ [前] 廿八才…横並^イ [国書]

廿八才…横並

三十才…冬歟云々 — [九] ナシ [前] 三十才…冬歟云々

^イ可置 — [国書] 可在 [前] 可有 / 斎宮 — [国] 斉宮 /

冬歟云々 — [国] 是云々

前斎宮 — [国] 前斎宮

同上 — [前] 同 [九] うえにおなし

同上 — [前九] 同

同上 — [前九] 同

きんもち絵師

左近中将朱雀院よりの御使

絵師―〔前〕画師

松風 三十才

花散里上

明石上母

三十才―〔九〕ナシ〔前〕三十才イ

中務親王あかしの尼の祖父

民部大輔

祖父―〔前〕祖母〔父〕

頭中将

兵衛督

藏人弁うちよりの御使

右大弁 一本左大弁

薄雲 三十 三十一至秋 38才

明石上母

少将明石姫君の女房

三十…至秋―〔九〕ナシ〔前〕三十…至秋イ

花散里

中将源氏官女

僧都 冷泉院に昔の事申さかせ奉し人
一本法務の僧都とあり

奉し人―〔前九〕し人〔書国〕奉りし人

王命婦 御くしけ殿にうつりてまいれり

王命婦…まいれり―〔九〕ナシ

槿 三十一至冬

槿―〔九前〕朝顔／三十一至冬―〔九〕ナシ〔前〕三十一

槿斎院宣旨

源典侍 尼に成て女五宮の
弟子にてあり

槿―〔九〕朝かほの／弟子―〔前国書〕御弟子

花散里

至冬イ

乙女三十二 三四才

權齋院宣旨

民部卿タタ霧あさなつき給日
着せし人

左中弁同日講師

左大弁入学の日まいりし人
松風の左大弁同人歟

式部大輔同

大内記

雲居雁母わかんとをりといへり
按察大納言の今の北かた

わかんとをり…北かた―〔九〕あせちの大納言のちゝの北
のかたわかんとほりといへり／わかんとをり―〔国〕わか
むとほり／按察―〔国〕按察使

小侍從雲井のかりのめのとこ

宰相君タタ霧のめのとこ * 1

めのとこ―〔前〕めのとこ（こゝ）〔国〕めのとこ
タタ霧のめのとこ―〔前〕タタ霧のめのとこ（雲ゐのかりのめのとこ）

雲ゐのかりの乳母 * 2

藤内侍母

雲ゐのかりの乳母―〔前〕ナシ／藤内侍母―〔国〕藤ない

花散里

紫上継母

し

玉鬘三十五

三十五―〔九〕ナシ〔前〕三十五イ

右近

大夫監

少貳妻

三条少貳妻か下女

妻か―〔前九〕妻の

花散里上

花散里上―〔九〕花ちる里

初音 三十六正月豎並也 此卷ノ並皆豎也 以下効之

中将

花散里

初音―〔前〕初子／三十六：効之―〔九〕ナシ〔前〕三十
六：効之イ／豎並―〔国〕豎横（並）

胡蝶 三十六自三月至夏

中宮亮

右近

三十六：至夏―〔九〕ナシ〔前〕三十六：至夏イ

みるこ玉かつらのわらは 39オ

螢 三十六 五月

大夫監

三十六五月―〔九〕ナシ〔前〕三十六五月イ

瞿麦 同六月

近江君母

五節君

瞿麦―〔九〕とこなつ／同六月―〔九〕ナシ〔前〕同六月イ

妙法寺別当大徳

たいふの君 弘徽殿の女房

中納言君 同

篝火 同初秋

右近

右近大夫

同初秋―〔九〕ナシ〔前〕同初秋イ

野分 同秋

宰相 君秋好の女房

花散里

内侍 同

右馬助 夕霧の家人

同秋―〔九〕ナシ〔前〕同秋イ
右馬助―〔九〕うまのすけ

行幸 同十二月ヨリ三十七ノ二月マテ

右大臣

藏人 左衛門尉

同…マテ―〔九〕ナシ〔前〕同…迄イ

蘭 三十七オノ八九月

弁玉 かつらの女房

蘭―〔九〕ふちはかま／三十七…九月―〔九〕ナシ〔前〕

三十七…九月イ

真木柱 三十七冬ヨリ至三十八秋

弁玉 かつらの女房

木工君 ひけ黒の女房

三十七…秋―〔九〕ナシ〔前〕三十七…秋イ／至三十八秋
―〔国〕三十八至秋
木工君―〔九〕むくの君／ひけ黒の―〔前〕ひけくろの大

中将 ひけ黒の北方の女房

中納言 *2

紫上継母 *1

宰相 以上兩人冷泉院にむすめ *3
たてまつりし人とみゆ

*1 2―〔書〕1 2〔補入〕

右近 *4

*2 3 4―〔国〕4 3 2〔揭示順〕

梅之枝 三十九ノ春

大貳 六条院に香ともたてまつりし。(。と) みゆ

花散里

内侍明石の中宮の御くしあけにはへる

左大将 春宮にむすめたてまつらんとありし人

左衛門督 草子か、せ」 40才
給し人

雲井雁のめのと

右大臣 夕霧にむすめの事
けしきとりし人

中務宮同上

藤裏葉 三十九 自三月至十月

中務宮

右近将監

灌仏の御導師

雲井雁母

明石上母

花散里

たいふのめのと 雲井のかりのめのと
六位すくせといひし人

宰相乳母

左少将

右少将

若菜上 三十九ヨリ至四十一

三十九ノ春―〔九〕ナシ

とも―〔前〕(。ともイ)／(。と) みゆ―〔前国書九〕とみゆ

御くしあけにはへる―〔書〕御くしけにらる〔前〕御くし

あけにまいる〔国〕御くしあけにらる

たてまつらん―〔書〕たてまつらむ／左衛門督…中務宮同

上―〔九〕ナシ

右大臣―〔国〕右大弁

三十九…十月―〔九〕ナシ〔前〕三十九…十月イ

御―〔九〕ナシ／雲井雁母―〔国〕雲井雁

三十九…四十一―〔九〕ナシ〔前〕三十九…四十一イ

朱雀院の藤壺の母更衣

女三宮の乳母

左中弁女三宮のめのと
せうと

藤大納言朱雀院の別当
女三宮の御うしろみのそみし人

御うしろみ―〔九〕御こうけん

右大臣

中宮権亮院の殿上にも
さふらふといへり

右大臣―〔国〕右大臣

山の座主

紫上継母

中務源氏官女

中将同

中納言君臘月夜の女房

和泉前司おほろ月夜の
中納言の君のせうと

中納言の君の―〔国〕中納言の

中納言乳母女三宮の
めのと

右大将依病職を辞す

依病―〔前〕病によりて〔九〕やまひによりて

頭中将源氏御賀の奉行

花散里上

上―〔九〕ナシ

明石上母

春宮宣旨典侍一宮の御うふゆにまいる

小侍従女三宮のめのと
薫大将五六才の時うせぬるよし橘姫巻にみゆ

一宮の御うふゆに―〔九〕一条ノ宮ノうふやに
めのと―〔書〕ゐとこ〔九〕めのと也

五六才―〔前〕五六歳

〔同下四十一 三月ヨリ至四十七

四十一：四十七―〔九〕ナシ〔前〕四十一：四十七イ

紫上の継母

明石尼

中務君源氏官女

故僧都北山の僧都也 41才

花散里

一条御息所落葉宮の母儀

小侍従女三宮のめのと

侍従乳母女三宮のめのと
小侍従か母

柏木大納言の乳母侍従のめのとあね 大納言うせて後いく
程なくなく成ぬるよし橘姫巻にみゆ

落葉宮―〔国〕落葉君ノ母儀―〔九〕母
めのと―〔前〕めのとこノ侍従乳母―〔前〕侍従（乳母）
なく成ぬる―〔前〕（なく）成ぬる〔国〕なくなる

斎院女三宮よりまつりの御契に
女房たてまつり給

按察君女三宮の
上臈女房 *1

源中將按察君にかたらふ人 *2

女房―〔前〕女房（ともイ無）〔九〕官女の

按察君に―〔国〕按察使君に

*12―〔前〕21〔掲出順〕

柏木四十八 自春至秋

小侍従

かつらき山の行者

四十八：秋―〔九〕ナシ〔前〕四十八：秋イ

かしは木のめのと

中宮大夫

一条御息所

少将君一条御息所のめい
大和守なる人のいもうと

めい―〔九〕御めい〔前〕御イ無めい

いもうと―〔九〕いもうと也

横笛四十九 薫二才

一条御息所

故式部卿宮但是
桃園宮歟

四十九：才―〔九〕ナシ〔前〕四十九：才イ

是桃園宮歟―〔九〕も、そのか

夕霧のわか君の乳母

鈴虫五十才 豎ノ並

女三宮のめのと

式部大輔

五十：並―〔九〕ナシ〔前〕五十：並イ

めのと―〔前〕御（無イ）めのと

左衛門督

夕霧五十

一条御息所

律師

五十―〔九〕ナシ〔前〕五十イ

少将君 一条宮の女房

大夫のめのと

左近 一条上の女房

御法 五十一 春ヨリ至秋冬歟

花散里上

幻 五十二才

中納言君

花散里

仏名の御導師

句兵部卿宮

別人なし
此卷以下至字治宿木年紀錯乱事別抄之
花鳥之儀有異違 不可用之

大夫 右近のせうよりかうふり
えたとあり

大和守 一条御息所の御おい
少将君のあに也

中将君 42才

僧都 紫上の経仏の事
おはせつけたるとあり

せう 〔国〕せうと

おい 〔前〕をひ〔九〕をい

あに 〔九〕せうと

五十一 冬歟 〔九〕ナシ〔前〕五十一 冬歟

上 〔九〕ナシ

五十二才 〔九〕ナシ〔前〕五十二才

おほせつけたる 〔九〕おほせつけられたる

〔国〕おほせつけたる

兵部卿宮 〔前〕句。兵部卿宮〔九〕にほふみや

薰 不可用之 〔九〕ナシ〔前〕薰 不可用之

二十才 〔国〕二十歳事 〔前〕斗。事 別抄之 〔前〕

別抄也 有異違 〔前〕有異〔国〕有異違名

紅梅 薫中納言 堅ノ並也

按察大納言の故北方

竹河 薫四位侍従 末中納言 横ノ並也 但末ハ堅ニモナルヘキ歟

たいふの君

なれき

中将のおもと

橋姫 薫十九才宰相ノ年ヨリ二十一歳ニ至歟
初ニハ優婆塞宮ノ事年月ヲ送ル心アリ

宇治阿闍梨

小侍従 女三宮の女房

かしは木のめのと弁尼か母

左近将監かほるの文の使

椎本 薫二十二ノ春ヨリ二十三ノ夏マテ

阿闍梨

総角 薫二十三歳秋ヨリ其年ノ暮マテ
花鳥薫二十歳云々不用

薫…並也―〔九〕ナシ〔前〕薫…並也_イ

按察―〔国〕按察使

竹河―〔国〕竹川／薫…ヘキ歟―〔九〕ナシ／末ハ―〔前〕末ニ

薫…心アリ―〔九〕ナシ〔前〕薫…心アリ_イ／二十一歳―〔前国〕二十一才

尼か母―〔前九〕尼の母

薫…夏マテ―〔九〕ナシ〔前〕薫…夏マテ_イ

総角―〔書〕角総／薫二十三歳…不用―〔九〕ナシ〔前〕薫二十三才…不用之_イ／二十三歳―〔前国〕二十三才／二十歳―〔前〕二十才

阿闍梨

中宮大夫

中宮大夫―〔前九〕中宮大夫にほふ宮の御むかひに参りし人

早蕨 薫二十四才

薫二十四才―〔九〕ナシ〔前〕薫二十四才イ

阿闍梨

たいふの君中の君の女房

たいふ―〔前〕たゆふ

寄生

並ニアラサレトモ堅横相交テ前ノ事ヲモ云来也

寄生―〔九〕やとり木／薫云来也―〔九〕ナシ〔前〕薫

上野宮殿上にさふらひ給とあり

右京大夫匂宮の侍の別当

：書来也イ〔書〕薫出来也

僧都

按察君薫のおもひ人 43才

阿闍梨

大ゆふの君

大ゆふ―〔前〕たゆふ〔書〕大いふ〔国九〕たいふ

少将中宮の女房

中宮大夫

中宮の女房―〔九前〕中君の女房

大夫―〔九〕だいぶあけまきあけまきおなし人歟の同人か〔前〕大夫あけまきおなし人歟

東屋 薫二十五歳 八月比ヨリ九月マテ

薫：九月マテ―〔九〕ナシ〔前〕薫：九月マテイ／二十五

歳―〔国〕二十五才／八月―〔国〕八月の

源少納言

讃岐守

大ゆふ

浮舟君のめのと

大ゆふ―〔前〕たゆふ〔九〕たいふ

右近たいふかむすめ

少将中君の女房

たいふか―〔前〕たゆふか

平重経 中宮のさふらひ

中宮大夫

侍従浮舟君の女房

女房―〔九〕官女

浮舟 薫二十六歳 正月ヨリ三月末マテ也

薫：マテ也―〔九〕ナシ〔前〕薫：マテ也イ／二十六歳―

〔国〕二十六才

たいふの君 少将君

たいふ―〔前〕たゆふ

大内記道定 式部少輔かけたりとみゆ

式部少輔かけたり―〔九〕式部のせうかけたる

出雲権守時方 藏人よりかうふりえたる匂宮のめのとこ此人にや又すゑに左衛門大夫といへるも此人なるへき歟

えたる―〔九〕えたり／めのとこ―〔書〕めのと也

なるへき歟―〔九〕にや

右近浮舟の女房 浮舟のめのとまゝといへり

大藏大輔仲信 薫の家人道定かしうと

薫の―〔国〕薫か／しうと―〔九〕しうと也

侍従君 因幡守 時方がおち宇治のやどりの家あるし

おち―〔前〕をち

浮舟乳母のむすめ 匂宮のめのと 受領のめにて遠き国へくたるといへり

めにて遠き国へ―〔九〕つまにておきの国へ

いへり―〔国〕あり

右近大いふかむすめ 山の座主

大いふ―〔前〕たゆふ〔九〕たいふ

（。浮舟の）うこんかあねひたちにありしとみゆ 内舎人

（。浮舟の）―〔前〕（浮舟のイ）〔国九〕浮舟の（*本行）〔書〕ナシ

右近大夫 うとねりかむまこ

蜻蛉 薫二十六才 浮舟卷ノ終ノ其翌日事也
五月ニウツリテ秋ニ成也

薫：成也―〔九〕ナシ〔前〕薫：成也イ／翌日―〔国〕翌

右近 浮舟の女房

浮舟乳母

時方

侍従君後二后の宮にまいりき

浮舟のめのとこの大徳

同大徳のおちのあさり」⁴⁴オ

大夫 宇治の御荘の人

うとねり

大蔵大輔仲信

阿闍梨いまは律師なりといへり

小宰相 一品宮女房
かほるのおもひ人

大貳 かほるの女房

大納言君 一品宮の女房

馬頭 故式部卿宮の北方のせうと

宮の君のまゝ母馬頭かいもうと

弁のおもと后の宮の女房

中将君 一品宮の女房

手習 ^{薫二十六七才}カケロウノ巻ノ始ト同時分也 浮舟ノウセテ後ノ翌日ノコト也 其年暮テ次ノ年ノ春ノコト夏マデ也

横川僧都

同僧都弟子

小野大尼 僧都母

衛門督の後家尼 ^{小野大尼女}僧都の妹

一条御息所

少将尼

日の／ウツリテ―〔前〕ヲハリテ

おちの―〔前〕をちの

莊―〔書前国〕庄〔九〕さう

いまは―〔国〕いまに

小宰相―〔九〕小宰相君／かほるの女房―〔九〕かほるの

官女

一品宮の女房―〔九〕一ほんのみやの官女／馬頭―〔九〕

右馬のかみ

后の宮の女房―〔九〕后ノ宮（齋宮イ）の官女

一品宮の女房―〔九〕一ほんの宮（齋宮イ）の官女

薫：マデ也―〔九〕ナシ

僧都母―〔九〕ナシ／後家尼―〔前〕後家（ニイ）

右近 浮舟女房

侍従

こもき

とのもり」

中将 小野の尼のむかしのむこ

禪師 君僧都の弟子
中将のおとうと

藤中 納言中将のいまかよふ所
但ひけくろの息歟 猶可尋之

さゑもん

山の座主

少将 尼のせうとのあさり

宰相 君一品宮の女房

紀伊守 大尼公のむまこ

常陸の北方 紀伊守かいもうと

宇治律師

夢浮橋 薫二十七才 手習巻ノ末ハ春也 此巻ハ夏比ト見ユ

横川 僧都

小野 大尼

小野 尼

紀伊守」
45才

本云

此物語系図者長享二年

春之比肖柏等相談之訪宗祇

法師指南粗所清書之本也被

浮舟―〔前〕うきふねの／女房―〔九〕官女

むこ―〔九〕むこ也

中将のおとうと―〔前〕中将のせうと（おとうとイ）

猶可尋之―〔前〕猶可勘〔九〕ナシ

女房―〔九〕官女

公―〔前〕君／むまこ―〔九〕まこ／か―〔九〕の

薫：見ユ―〔九〕ナシ〔前〕薫：見ユイ／比ト―〔国〕比
とも

紀伊守―〔九〕きのかみ

本云…：永正十二八―〔九〕ナシ

本云―〔国〕ナシ〔前〕伏見殿貴筆本奥書

引余習以件愚本染禿筆

不可出窓外者也

永正第九臘月二十七日

老塊散木〔御判〕

卷、年紀為備忽忘大概注付之 永正十 二 八

此一冊依羽州羈客

碩与懇命於燈下卒

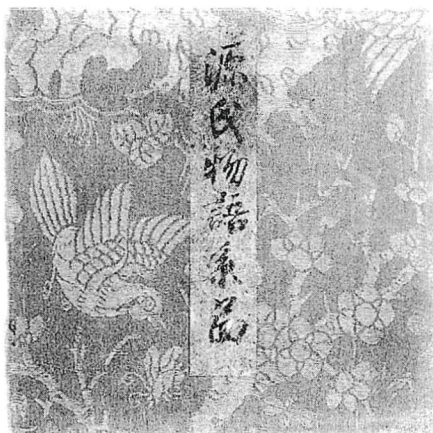
馳秋毫深可禁外見而已

天文甲辰曆中秋戌午

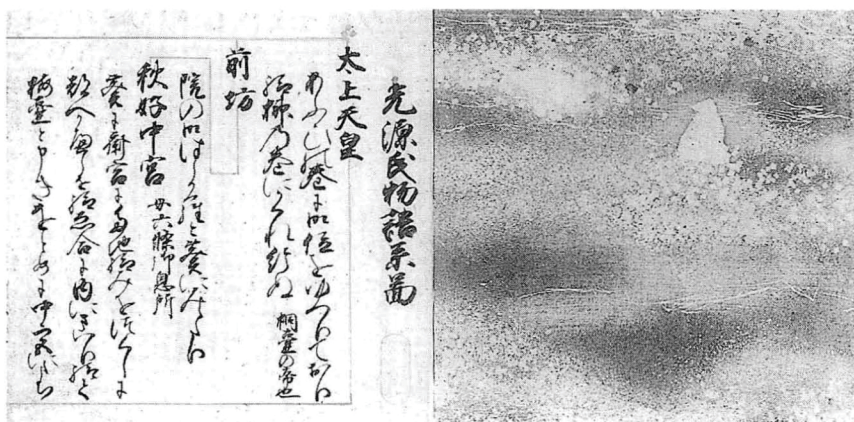
亜槐〔花押〕 46才

老塊散木―〔前〕老塊散木〔逍遙院也〕

此一冊：亜槐〔花押〕―〔前国書九〕ナシ



表紙



1才

前見返し

河津の里原からとくわ

桃園式部卿官

女三子と云ふ巻にたり

権齋院

らまに女房のいはいおつる

と云ふからけりいれせむ

と云ふりうのうま女房のう

三宮

院のそつにけり也務政のき

あふりし市いほつ海づれ

女五宮

りうのうま女房のう

東佳院

女三子と云ふ巻にたり

桐壺巻に春宮のうま女房のう

われと云ふりいれせむ

と云ふりうのうま女房のう

のふと一院と云ふりいれせむ

今上

女三子と云ふ巻にたり

2才

われと云ふりいれせむ

と云ふりうのうま女房のう

のふと一院と云ふりいれせむ

女一宮

われと云ふりいれせむ

と云ふりうのうま女房のう

のふと一院と云ふりいれせむ

と云ふりうのうま女房のう

二品内親王 女三子と云ふ巻にたり

と云ふりうのうま女房のう

のふと一院と云ふりいれせむ

と云ふりうのうま女房のう

女四宮

われと云ふりいれせむ

と云ふりうのうま女房のう

のふと一院と云ふりいれせむ

と云ふりうのうま女房のう

女四宮

女五宮

女三子と云ふ巻にたり

3才

白雲山

若君
母字法中君

大正十一年

常陸
更衣

中務省
母國春家

然るのちゆき夕暮を待た
 孫よりきて車にのせられ
 交わりの念を去るはあやう
 阿ふり始人屋のまじふは
 の處にまじふ人

一品宮
母春宮におり

女二宮
母後宮女御

六條院
母桐臺更衣

元服しき來に仲均

正三
中
同卷

卷之六

うゑに雲は立ちて

乃上至望

夕霧乃之長

子之服也

不問巻の秋原月くちの原種
流物をこれ時ほどよるもの
中納言と云ねお藤原の朱檀
中納言と云ねお藤原の朱檀
いづれも物もともな巻より
石を竹川より石を竹川より
中納言と云ねお藤原の朱檀

中納言と云ねお藤原の朱檀
いづれも物もともな巻より
石を竹川より石を竹川より
中納言と云ねお藤原の朱檀

中納言と云ねお藤原の朱檀
いづれも物もともな巻より
石を竹川より石を竹川より
中納言と云ねお藤原の朱檀

中納言と云ねお藤原の朱檀
いづれも物もともな巻より
石を竹川より石を竹川より
中納言と云ねお藤原の朱檀

6才

石衛門将 母三條正

わふ下朱檀は此巻の試書
中納言と云ねお藤原の朱檀
中納言と云ねお藤原の朱檀
中納言と云ねお藤原の朱檀

中納言と云ねお藤原の朱檀
いづれも物もともな巻より
石を竹川より石を竹川より
中納言と云ねお藤原の朱檀

中納言と云ねお藤原の朱檀
いづれも物もともな巻より
石を竹川より石を竹川より
中納言と云ねお藤原の朱檀

7才

源寧和仲物
母三書之

少卿

同卷中實中推本（實中）

下又幻の巻に所収なり

殿上ノ格ニ付今ハ

頭中
母者内なるもの

新河水源考

句をいふといふは時父

と彼を待つてゐた。

[illegible]

官位少將 廿三歳上

一、不交也。乃時橫川の儒教。

人中文四俊之入新河之無庸

佐推本に蔵人兵衛佐と云下

童
一

屋敷に今上女二文敷の寓

時常出入

七郎

春玄女部 母三條上

自來卷五

8才

中
君

ふたつ

三君
毋敢典侍

官君

五
五

己上三人夕霧の巻にみえ

六、君
母夜由乃のしり

卷之六

鑒兵部

江崎文子と西條雅彦

其乃時無及と云ふを以て

紅梅より

待從
母の方

物といふ言はれしに
又いふに

人

臺

同

計二
人
下
朱
雅
以
爲

歲暮一山人

家方 母方

9
才

前甬院

先帝

武王克商

溥儀醫院

源氏家 廿五夜

朱權の書文は、可いといふは、
て、其の文とて、治政を論じて、
その文、わが上にある。

蘭子石岳樓梅子山隱記

若君

子

中將

侍從

夷乃大恟

何れも其の如く

ひんがし

無上之寶

三二 母梅卷上納云是

十、上時原より悪く人々

名取の葉をみづから

此書乃

冷泉院女師
母福黒心方にあり

12
才13
才

かゝる自由は、いかに
君に下されども、是より
いかに、いかに

常陸宮

阿國

源氏に、海は、あつた、いかに
と、いかに、いかに、いかに
あつた、いかに、いかに、いかに

あつた、いかに、いかに、いかに

いかに、いかに、いかに、いかに

橘政大政

源氏に、海は、あつた、いかに
と、いかに、いかに、いかに
あつた、いかに、いかに、いかに

あつた、いかに、いかに、いかに

14才

いかに、いかに、いかに、いかに
あつた、いかに、いかに、いかに

石中

いかに、いかに、いかに、いかに
あつた、いかに、いかに、いかに

藤太

いかに、いかに、いかに、いかに
あつた、いかに、いかに、いかに

あつた、いかに、いかに、いかに

橘政大政

15才

紅梅古尺牘

神を尊く、鶴や松のまゝを
 日守砂ころいし人、
 高き舟がわたり、
 舟柄まゝ、
 のまの事り、

冷泉院（すうり）といふ寺あり。楊
梅と云ふ納言の女河上原納
言のけり。女院の御下り又
推りし。自天のうきとて。松じ
うへより。藤と納言といふ人。金
一庵といふ。つゝ庵より。楊
梅と納言といふ。ふ。重

上
上
母

神祇に意づく衆のまゝに
 君の事多かり人

16
才

陳景微印

紅梅香雪入詩吟

中丞 母 弟

右衛門督

とて一喜に有侍はといふは人々

滕宰相

口下が舌を食ふ人

廿二人の少子ありてその名も其父に

文政十一年

あふしひは晴れきり

冷泉流石の如く

頤中約

藏人少物

廿二人より巻ノ一ノ末

しん殿を接する時はいくらか

今より此のうとてふ人々務ま

わゝ一葉まがいの花を煮てけしむ

彼を父と
而して因
て

すゝめ

上平少壯無憂

17才

こころこころをうけ
八郎君

これ程は踏まへて何となく
一人旅のうたをうたへて
思ふはつとていふをうたへ
玉盤高侍 母リおと
このうたは月のとけりて
てはうたへてうたへて
と京へのかう南へ南侍は
いまうたへてうたへて

秘徽殿之御 母同相本

みとけりてうたへて
夕霧をうたへて 母相本をうたへて

雲井のうたへてうたへて
近江君

母もいふうたへて

二條太政大臣

朱雀院の母のうたへて
なまけりてうたへて

18才

ふーふ
藤上納言

鞠群

うたへてうたへて
藤上殿之御

白位少将
うたへてうたへて

うたへてうたへて
右中將

か二八源氏
うたへてうたへて

うたへてうたへて
秘徽殿之御

うたへてうたへて
近江君

秘徽殿之御

朱雀院の母のうたへて
うたへてうたへて

藤上殿之御

うたへてうたへて

19才

政仁公家

宣統元年

五君

花のえんま

鵬月夜遊

蘇子瞻集卷之四

後、亦、由、本、二、月、當、

日下に居るものを見る

后上卷

たふしに病む

いよいよ大正五年

工花月

修理之

廿二人

水師

冷泉院江戶町

女子

20

藤臺女御

20
才

今上春宮以時正石

此中文字乃係二家所

とて多し海に珍

宿來のくは又物とて歴京殿

三番

庖丁

竹川乃老上

夕霧のしほりまのてん

少くとも一時間以上は

石工作

命上乃祖文昭石大長子

壽星公政公作

一、右の如く記すべし。

下をなす七人なりと云すなり

此
三
子
之
名
也

竹河

顏中將

21
才

源氏物語

源氏物語の
いふ物語を
見ると
人

朱権は
今より
母也

つらつら
わかれ

藤中納言

いふ物語を
いふ物語を

わかれ
いふ物語を

いふ物語を
いふ物語を

いふ物語を
いふ物語を

次郎

いふ物語を
いふ物語を

いふ物語を
いふ物語を

いふ物語を
いふ物語を

石長

いふ物語を
いふ物語を

いふ物語を
いふ物語を

いふ物語を
いふ物語を

いふ物語を
いふ物語を

22才

石長

いふ物語を
いふ物語を

いふ物語を
いふ物語を

いふ物語を
いふ物語を

いふ物語を
いふ物語を

いふ物語を
いふ物語を

藤中納言

いふ物語を
いふ物語を

朱権

いふ物語を
いふ物語を

いふ物語を
いふ物語を

いふ物語を
いふ物語を

いふ物語を
いふ物語を

いふ物語を
いふ物語を

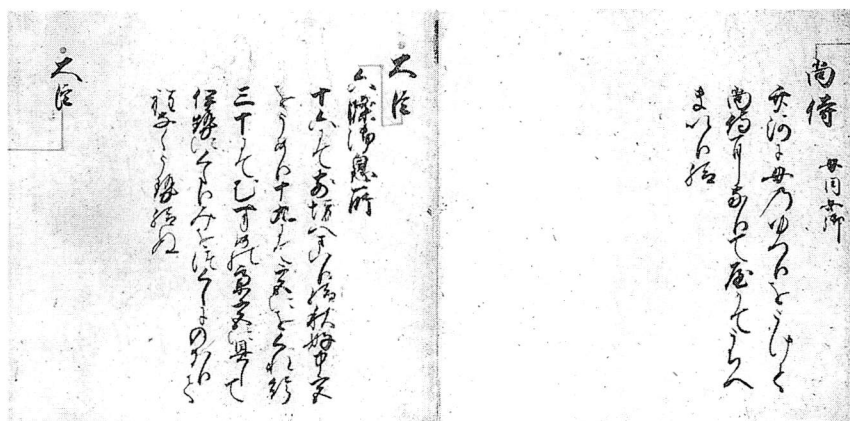
石長

いふ物語を
いふ物語を

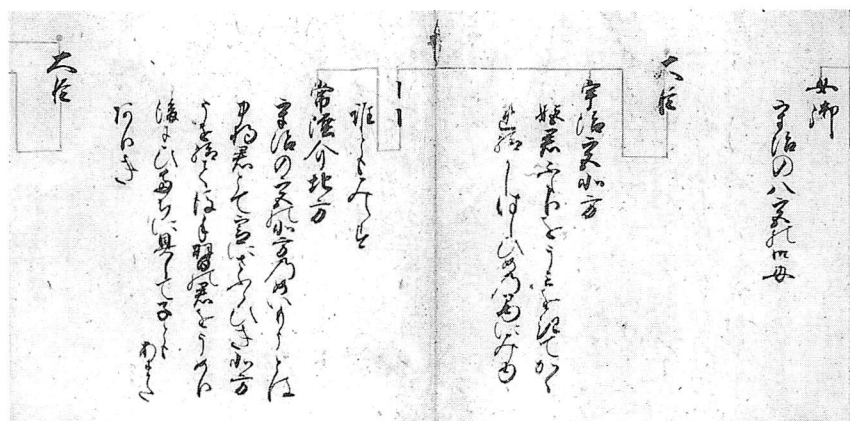
いふ物語を
いふ物語を

いふ物語を
いふ物語を

23才



24
才



25
才

入道備前守

建武の中わたりしうきと権勢
小あらは國との隙をうけい
今もつゝお上りの國とあらは
ぬはふ入ぬ

明石上 廿五日のうきと

松をばは海といふとてお井
すううと女もお屋もあらは
それいといふも

梅冬文納言

雲林院律師

源氏にあらはれまゝとせぬ
くも堅まじくわ

桐壺更衣

源氏とてとてあらはれと
まじくわいりておぬはれ
海とあらはれとあらはれ
魚をいりておぬはれ

梅冬文納言

26才

息上女 母小信頼朝也

梅冬文納言

乙部系

おしやういぬいぬ
らういぬいぬいぬ

大將

おしやういぬいぬ

右進少將

おしやういぬいぬ

宿中納言

右衛門侍

源氏中

おしやういぬいぬ

おしやういぬいぬ

おしやういぬいぬ

空蟬君

27才

又乃中納言と云くは伊豆介の
家より又公陸にありて今
所具とて今に國屋と云ふの如
て同馬に介とて換へばわぬ
と云く之を陸に弟に云と云

右衛門督

外
勿小野居

中ね々々人おる方々
うゝと習りて

春儀宮内卿

明石乳母
母院の宣旨

源氏のこころを時をへに
松風はきくそねのり

三位中約

夕顏上

政は乃ち病入少ゆともいへ
しあるいて玉ひとてうづれ
はり月の霜と源氏よりい

三
 二
 一

宰相

李相若

玉の如き乃ち屏風に映るす
所は人の心なりとて人々の
心に映るなりとて人々

泰議藤原惟光

けりて其の情をうけしは

兵衛尉

童に殿上とゆふりては御

藤典子

又都は露のたれをい
人々に内場のまじりて

山阿周旋

さき今つる兄とくはふた
少将命婦

クハのまげさ成時おね
命婦さうとれのとていへ

秦河守妻

クハはふた成時おね
なりさ

前橋康吉

源義清

天竺をたふたがうたわめ
なりさ

か納まふたがうたわめ
なりさ

五節

ふたふたふたふたふた
なりさ

石中群

さふたふたふたふた
なりさ

群居

さふたふたふた
なりさ

さふたふたふたふた
なりさ

のさふたふた

浮城介

けふはふたふたふた
なりさ

国危とのふたふた
なりさ

紀伊守

源成とのふたふた
なりさ

国危とのふたふた
なりさ

けふはふたふた

源成とのふたふた

源成とのふたふた
なりさ

さふたふたふたふた
なりさ

さふたふたふたふた
なりさ

さふたふたふたふた
なりさ

さふたふたふた

源成とのふたふた

さふたふたふたふた
なりさ

さふたふたふたふた
なりさ

人壽

32
才

けふ人泣くにあはれけり

33
才

之のり
 楊石介素
 夕日の暮いなり
 婦のり
 兵部素
 夕日の暮いなり
 夕日の暮いなり
 夕日の暮いなり

不備令婦
 夕日の暮いなり
 夕日の暮いなり
 夕日の暮いなり

34才

桑島之外人
 桐臺
 石工辨
 藤壺
 内侍
 希木
 石馬頭
 藤成
 中納言
 空輝
 氏親
 夕顔
 不貳乳母
 楊石介
 石近
 夕顔
 文常
 小山
 明石

桑島之外人
 桐臺
 石工辨
 藤壺
 内侍
 希木
 石馬頭
 藤成
 中納言
 空輝
 氏親
 夕顔
 不貳乳母
 楊石介
 石近
 夕顔
 文常
 小山
 明石

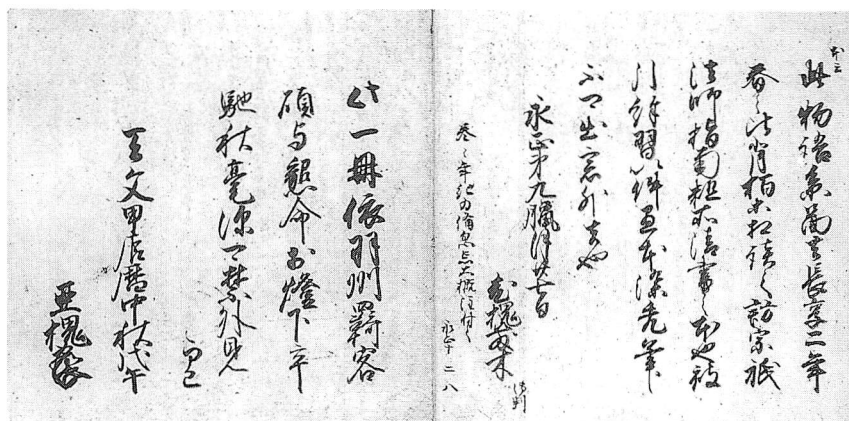
35才

[illegible]40
才[illegible]

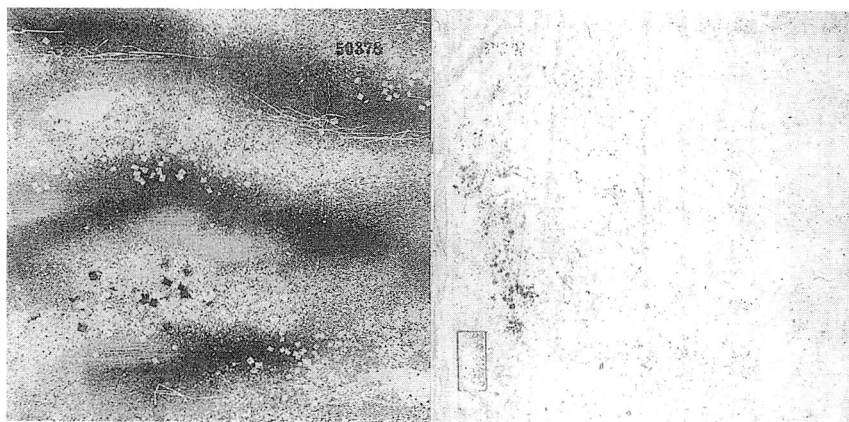
41才

44
才

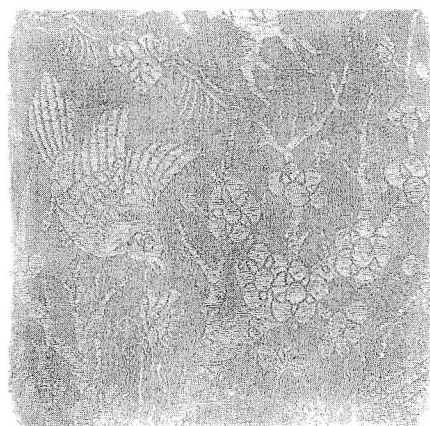
45才



46
才



後見返し



裏
表
紙